

令和 2 年度 卒業論文

指導：遠藤歩先生

大学生におけるノスタルジア喚起量と  
レジリエンス及び時間的展望との関連

文学部 心理学科 学籍番号 NB7041  
氏名：山川美緒香

## 目次

<b>問題</b> .....	<b>1</b>
ノスタルジアの定義 .....	1
ノスタルジアの先行研究 .....	3
レジリエンスの定義 .....	4
レジリエンスとノスタルジアの関連 .....	5
時間的展望の定義 .....	6
時間的展望とノスタルジアの関連 .....	8
本研究の意義及び仮説 .....	10
<b>目的</b> .....	<b>11</b>
<b>方法</b> .....	<b>12</b>
調査時期 .....	12
調査参加者 .....	12
質問紙 .....	12
Southampton Nostalgia Scale (SNS)日本語版 .....	12
レジリエンス尺度 .....	13
時間的展望体験尺度 .....	14
手続き .....	14
倫理的配慮 .....	14

<b>結果</b> .....	<b>15</b>
記述統計 .....	15
相関分析 .....	15
重回帰分析 .....	20
<b>考察</b> .....	<b>28</b>
相関分析 .....	28
全体・男性・女性におけるノスタルジア喚起量と レジリエンス及び時間的展望との相関 .....	28
全体・男性・女性におけるノスタルジア喚起後気分と レジリエンス及び時間的展望との相関 .....	29
ノスタルジア喚起量及び喚起後気分と各尺度の相関 .....	30
重回帰分析 .....	32
HP群・HN群・LP群・LN群における レジリエンスとの重回帰分析 .....	32
HP群・HN群・LP群・LN群における 時間的展望との重回帰分析 .....	33
総合考察 .....	35
<b>引用文献</b> .....	<b>36</b>
<b>謝辞</b>	

## 問題

### ノスタルジアの定義

我々は生きていく上で、様々な事柄を記憶しながら過ごしている。記憶とは、自身が経験してきたものの表象であり、中でも自己に関する記憶である自伝的記憶には「自分がどういう人間か」という情報が多分に含まれている。それゆえに自伝的記憶の想起は自己概念の形成を促進するとされており (Rubin, Rahhal, & Poon, 1998)，特にアイデンティティの確立が課題である青年期においては、自伝的記憶の役割が非常に大きいことが明らかになっている (長峯・外山, 2019)。

自伝的記憶に関連した概念として「ノスタルジア」がある。ノスタルジアは、長峯・外山 (2018) によって「ある過去の出来事を懐かしく感じ、感傷的 (センチメンタル) な気持ちになること」と定義付けられており、ポジティブ感情が優勢でありながらネガティブ感情も同時に生じる複合感情であるとされている (Wildschut, Sedikides, Arndt, & Routledge, 2006)。Davis (1990) によれば、このノスタルジアという言葉はギリシャ語の *nostos* (家へ帰る) と *algia* (苦しんでいる状態 = 苦痛) に由来しており、故郷へ帰りたいと切なく恋い焦がれるといった意味合いを持っていたという。この言葉はスイスの医学生であった Johannes Hofer によって 1688 年に作られ、その後 18—19 世紀にかけて、医学的もしくは神経学的な疫病を指すものとして使用してきた。20 世紀の終盤には上述した定義のように、誰しもが経験しうる感情の 1 つとして浸透し、ここ 15 年程度の期間に多くの心理学的な実証的知見が蓄積され、栄養豊富で精神的な活力を提供する「心理的リソース」として捉えられるようになってきている (Sedikides & Wildschut, 2017)。

近年になってノスタルジア研究は益々盛んになっているが、ノスタルジアの分類方法についても複数提唱されてきている。Stern (1992) は消費者行動や広告研究の流れの中で、ノスタルジアを「個人的ノスタルジア」と「歴史的ノスタルジア」の2つに分類している。前者は個人の記憶すなわち自分の過去を理想化する感情であるとされ、主にエピソード記憶が深く関わっているのに対し、後者は自分が生まれる前の遠い時代や歴史上の人物に思いを馳せ再現された過去を理想化することを指しており、意味記憶が基盤になっているという。また、Baker & Kennedy (1994) は、実際に経験した過去に対する懐古感情である「実体験ノスタルジア」、間接的に経験する過去に対する懐古感情である「疑似体験ノスタルジア」、文化・民族や世代全体の表象となる懐古感情である「集合的ノスタルジア」の3つに分類している。さらに Havlena & Holak (1996) は、個人的経験か集合的経験かという観点、直接的経験か間接的経験かという観点の計4つを組み合わせて、「個人的ノスタルジア」「対人的ノスタルジア」「文化的ノスタルジア」「仮想経験ノスタルジア」の4分類を提案している。なお、本研究で扱うノスタルジアは、上述した分類の中では個人的ノスタルジアに該当するものである。

ところで、ノスタルジアの類似概念として「懐かしさ」が存在する。「懐かしさ」は、広辞苑（新村, 2018）にて「過去のことを思い出して慕わしく思うこと」とされており、辞書的な意味としては「過去を思い出して、それに対し憧れや恋しさなどの肯定的な感情を抱くこと」と解釈可能である。ノスタルジアと「懐かしさ」は同義で扱われがちであるが、双方には概念的な差異があることが示唆されている。具体的には、「懐かしさ」はノスタルジアと比較してポジティブな要素が強く、ネガティブな要素が弱いとされる（菅原・Tee・長峯・TamilSelvan・宮川・杉

江, 2018)。また, ノスタルジア喚起時に経験されるアンビバレント(両価的)な感情が, 懐かしさ喚起時には経験されにくい(長峯, 2016)ことや, ノスタルジアが喚起されることによって自己連続性が高まるという結果(Sedikides, Wildschut, Routledge, & Arndt, 2015)が, 懐かしさ喚起時には示されない(津村, 2015)ことなどが挙げられている。この差異に対し津上(2009)は, 感性史の観点から「懐かしさ」はノスタルジアと比べて「感傷的」な要素に欠けていることを指摘している(長峯・外山, 2019)。

## ノスタルジアの先行研究

これまでの先行研究で, ノスタルジアは数多くの適応的機能を持つことが実証的に示してきた(長峯・外山, 2019)。主要な機能として Sedikides, Wildschut, Gaertner, Routledge, & Arndt (2008) は, 「ポジティブ感情」, 「自己肯定感の維持・向上」, 「社会的絆の強化」, 「人生の意味付け」の 4 つを挙げている。これらの根幹には本来性(自己の内的な側面への意識・理解: Kernis, 2003)の向上があり, ノスタルジア喚起により「自分らしさ」を高く認知することによって諸機能に寄与していると考えられる。他にも, ストレスに対するコーピングとして機能する(Batcho, 2013), 向社会的行動が促進される(Stephan, Wildschut, Sedikides, Zhou, He, Routledge, Cheung & Vingerhoets, 2014), well-being が向上する(Baldwin, Biernat, & Landau, 2015), 社会的コンピテンスが高まる(Wildschut et al., 2006), 死への恐怖が低減する(Juhl, Routledge, Arndt, Sedikides, & Wildschut, 2011)などの効果がみられることが明らかになっている。

上述した効果に加え, ノスタルジアには, ネガティブな心理状態にお

いて喚起され、その状態を修復する機能があるということも知られている。すなわち、精神的健康や心理的な well-being を脅かすものに対する「バッファーとしての機能」があるとみられている。回避動機づけと接近動機づけを取り上げて、修復機能を検討した Stephan et al. の実験 (2014) では、回避したい将来の出来事 5 つを想起させることにより回避モチベーションを高める操作を施した実験群においては、通常もしくは好ましい出来事を想起した統制群と比較し、回避モチベーションが高まり、状況的なノスタルジアが喚起されていた。この結果は、回避モチベーションの上昇というネガティブな心理状態によりノスタルジア喚起が誘発されたことで、接近モチベーションが高められ心理状態をポジティブな方向へ修復したことを見唆している。

## レジリエンスの定義

ノスタルジアには「バッファーとしての機能」が備わっていると述べたが、類似した心理学的な概念として「レジリエンス」が挙げられる。レジリエンスとは、衝撃的なことや損傷・障害などから回復する力もしくはその影響に耐える力と定義され (Garmezy, 1991), レジリエントな個人はトラウマティックな出来事や好ましくない環境にさらされた際に、最初は落ち込みを経験するが、その後の過程においては長期にわたり安定して健康的な機能を示すことが特徴的であるとされている (Bonanno, 2004)。

国内外の先行研究をレビューし、平野 (2010) はレジリエンスの持つ個人要因を「資質的レジリエンス要因」と「獲得的レジリエンス要因」の 2 種類に分類している。前者は生得的な関連が強く、楽観性、統御力、行動力、社交性の 4 因子から成る要因であるのに対し、後者は後天

的に身に付けやすく、問題解決志向、自己理解、他者理解の3因子から成る要因とされている。これらの個人要因はいずれも、心理的適応感や自尊心等の精神的健康と正の関連があることが示されているほか (Connor & Davidson, 2003), 近年では「過去の経験」にフォーカスを当て、青年期のレジリエンスに与える影響を示唆する研究も盛んに行われている。一例を挙げると、浅沼 (2012) は、過去の承認経験がレジリエンスの多くの側面に影響するとしており、女性においては受容経験の及ぼす影響が大きいと述べている。また、三島 (2008) は過去にいじめられた経験を有する青年は、不適応感が強くなることを示している。以上のように、過去の経験、特に他者から受け入れられたり認められたりという対人的な経験は、現在の個人のレジリエンスに何らかの正の影響を及ぼし、過去に他者との間でいじめなどの傷付きを経験することは、現在のレジリエンスに何らかの負の影響を及ぼすと想定されている。

### レジリエンスとノスタルジアの関連

ノスタルジアとレジリエンスの関連については、孤独感がレジリエンスを介してソーシャルサポートの知覚を高める過程について検討した Zhou, Sedikides, Wildschut, & Gao (2008) の研究で述べられている。ここでは、孤独感がノスタルジアを喚起する程度が、レジリエンスによつて異なることを示している。すなわち、レジリエンスの高い人は低い人に比べて、孤独感が高まったときにノスタルジアがより高く喚起されやすく、喚起されたノスタルジアによりソーシャルサポートの知覚が高められるという。つまり、ノスタルジアは日常の中で孤独感が高まった際、親しい人からのソーシャルサポートをもらうなど有効な対策が即座に取れない場合の代替案としても機能するということである (三宅, 2018)。

## 時間的展望の定義

青年期におけるアイデンティティの確立に重要な役割を果たすものとして、冒頭にて述べた自伝的記憶想起の他にも「時間的展望」などが存在する。時間的展望とは、「ある一定の時点における個人の心理的過去および心理的未来についての見解の総体 (Lewin, 1951/猪俣訳, 1979)」と定義づけられており、過去・現在・未来の広がり、関連性、どの程度出来事を想起するのかなどの「認知的側面=時間的展望」、過去・現在・未来に対してどのような感情を抱き、どのような評価を行うかなどの「感情・評価的側面=時間的態度」、動機づけにどのような影響を与えるかなどの「欲求・動機的側面=時間的志向性」の3つが構成要素であるとされている（大石・岡本, 2009）。

時間的展望に関する心理学的研究が始まったのは 1930 年代に入ってからとされているが、今日に至るまでに様々な領域との関連が示されてきた。中でも主だったものは、先にも述べた通りアイデンティティの確立、つまり自我同一性との関連についての検討である。具体例として、大学生 285 人の時間的関連性と時間的態度、そして自我同一性地位それとの関連について検討した都筑（1993）の研究がある。時間的関連性の測定には Cottle（1967）のサークル・テスト、時間的態度の測定には SD 法による時間イメージ尺度が作成されて実施された。4 つの自我同一性地位を比較した結果、時間的展望のあり方に差異があることが明らかになった。まず、時間的関連性に関して、高い地位である同一性達成地位とモラトリアム地位の個人は、時間的関連性が高く未来優位展開（未来志向的）であった。一方、時間的態度に関しては、同一性拡散地位の個人は、自分の過去・現在・未来のすべてにおいて最もネガティブにとらえており、早期完了地位は最もポジティブであった。同一性達成地位

とモラトリアム地位は、その中間であった。以上のことから都筑は、同一性達成地位の個人は未来に対して、最も現実的で計画的な態度を持っていると結論している（杉山、1995）。

また近年では、時間的展望が個人の立ち直りや耐久性、つまりレジリエンスと関連しているとの見解も見出されている。過去展望・現在展望・未来展望がそれぞれどのようにレジリエンスと関連しているのかについて、勝俣（1995）は時間的展望についてリボンモデルを構造化し、過去・現在・未来の関係を示した。リボンモデルとは、過去展望、現在展望および未来展望の3つの展開の関係をフィードバックとフィードフォワードの考え方を適用しながら構造化した時間的展望のモデルである。それによると、時間的展望の各時制は独立しているのではなく、現在を中心に相補的関係にあるといえ、過去や未来をポジティブに評価することは現在をポジティブに評価することにつながると考えられる。したがって、時間的展望の全ての時制がレジリエンスと関連していることが推測される。このリボンモデルを軸として、青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連を検討したものに大石・岡本の研究（2009）がある。この研究は、大学生116名に対し、時間的展望体験尺度とレジリエンス尺度を用いた質問紙にて調査を実施したものである。結果として過去・現在・未来の時間的展望のそれぞれがレジリエンスと正の相関を示し、さらにクラスター分析を行ったところ、「展望高群」、「未来高群」、「過去高群」の3群が見出された。「展望高群」は、過去・現在・未来のすべてに対して肯定的な時間的展望を持つという特徴を有している。過去を受容して現在に充実感を感じ、未来に希望と目標を持ち、それらが現在に統合されている人で、3群の中で最もレジリエンスが高いということが明らかになった。「未来高群」は、未来に対して肯定的な時間的展望を持つ

傾向にあるが、現在・過去に対し否定的な時間的展望を持っている。つまり、過去や現在と切り離れた目標や期待を持ち、現実的な未来を展望することを回避している人であることが予想される。「過去高群」は、未来と現在に対して否定的な時間的展望を、過去に対して肯定的な時間的展望を持っており、過去の自分が現在の自分につながっている感覚を得ていないため、自分の存在を過去からの連續性の中で捉えることができない人だと考えられる（大石・岡本、2009）。

### **時間的展望とノスタルジアの関連**

大石・岡本の研究より、各時間的展望に対した個人の態度や評価は異なるということが伺えるが、その要因となる概念は複数存在するとされている。その一例として、未来への評価がノスタルジアによってポジティブに形成されることを示した Cheung, Wildschut, Sedikides, Hepper, Arudt, & Vingerhoest (2013) の研究が挙げられる。過去・現在・未来という3つの時間的展望の中でも、特に未来展望へフォーカスを当てたものである。Cheung et al. は、未来への肯定的な志向性として楽観性を取り上げ、ノスタルジアと楽観性には関連があるとして複数の研究を行った。その結果、ノスタルジアに関するナラティブには楽観性に関する記述が多く含まれること、ノスタルジアの経験によって楽観性が向上すること、ノスタルジアと楽観性の向上との関連は、自尊感情の向上によって媒介されることが示された。ノスタルジックな出来事によって自己が「価値のある存在」だと認識できるようになった結果、未来を肯定的に捉えられるようになったのではないかと Cheung et al. は考察している。また、ノスタルジアを感じることで未経験のアクティビティへの挑戦や新しい人間関係構築への積極性につながることも明らかにされており

(Abeyta, Routledge, Juhl, Iyer, & Jetten, 2015), 自身の未来をポジティブに捉えられるようになるだけでなく, 未来をより良いものにしようとする動機づけも生じるということを示唆している。

同様に, 未来展望の形成に影響する要因としてノスタルジアを取り上げた長峯・外山 (2019) の研究がある。この研究は, 大学生 44 名を ERT (Event Reflection Task: Sedikides, Wildschut, Arndt, Hepper et al, 2015) を用いてノスタルジア喚起群と日常喚起群 (統制群) ヘランダムに振り分け, 嘚起後の未来展望の程度に差がみられるかどうか検討したものである。またその際, 未来展望の群間差を本来性によって説明可能かも検討を行った。実験の結果, 未来ポジティブおよび未来ネガティブの得点を従属変数とした  $t$  検定によっていずれも群間差が有意であることが示され, 未来ポジティブに関してはノスタルジア群の得点が統制群の得点よりも高く, 未来ネガティブに関してはノスタルジア群の得点が統制群の得点よりも低かった。また, 未来ポジティブおよび未来ネガティブを従属変数とし, ブートストラップ法による媒介分析を行った結果, 本来性の間接効果は双方とも有意であった。これらの結果は, ノスタルジアを経験した実験参加者は, そうでない実験参加者よりも未来に対してポジティブな感情を抱いており, ネガティブな感情を抱いていなかったということを示唆している。また, ノスタルジアの喚起によって本来性が高まることで, 未来に対する態度が形成されるというプロセスも明らかになった。ノスタルジアの適応的機能に関する文面でも触れたように, 本来性の向上は, 自己の内的側面に対しての肯定, 社会的なつながりや存在意義の認識, これまでの出来事の振り返りや意味付け行為等につながるため, 自己のあるべき姿や目標が鮮明になり, 未来に対しての態度がポジティブになるのだと考えられる。

上述した多様な研究からも伺えるように、ノスタルジアという、過去を振り返って感傷に浸るという一見後ろ向きにも思われるような体験は、「確固たる自分」を見つけるといったアイデンティティ確立の助長になったり、未来に対する肯定的な態度や動機づけを生み出したりと、我々にとって重要且つ欠くことのできないものであると解釈可能であろう。

### 本研究の意義及び仮説

これまでに述べた通りノスタルジアは、本来性の向上によって様々な適応的機能を持ち、レジリエンスや時間的展望など諸概念との関連があることも示されてきた。しかしながら、ノスタルジアに関する近年の研究は、ノスタルジア状態を喚起した上でその機能や性質を明らかにするという類似内容のものが多く、海外での研究と比較すると未だ検討されていない領域が大多数を占めている。また、長峯・外山（2019）が行ったような ERT を用いたもの、所謂実験室的研究は多数存在しているが、日常的なノスタルジア喚起量に関する研究はほとんど存在していない。さらに別の観点から考えると、先行研究の限りではノスタルジア喚起後は前向きな気分やプラス感情につながるという知見が大半であるが、抑うつ傾向の高い者、過去に対し否定的な者はかえって落ち込みやマイナス感情が生まれてしまうのではないだろうか。

そこで、本研究では、青年期においてノスタルジアを感じる頻度（＝ノスタルジア喚起量）にどの程度個人差があるのか、喚起後は総合的にポジティブな気分・ネガティブな気分のどちらになるのか（＝ノスタルジア喚起後気分）を検討する。また、喚起量と喚起後気分が、レジリエンス及び時間的展望、特に未来展望とそれぞれ関連があるのかも検討する。研究の詳細な過程としては、まず全体・男性・女性におけるノスタ

ルジア喚起量と喚起後気分について、それぞれレジリエンス及び時間的展望との関連を分析する。次に、ノスタルジア喚起量高群・低群の2群、喚起後ポジティブ群・ネガティブ群の2群を掛け合わせた計4群に分類したのち、レジリエンス及び未来展望との関連を考察する。

仮説として、人それぞれ過去の経験や捉え方、重要性は異なるため、それらを思い出す頻度は個人によってばらつきがあることが予想される。また、喚起量の高低に関わらず、喚起後気分はポジティブ・ネガティブ双方に一定数分かれることが想定される。喚起後ポジティブ群はレジリエンスが高く、大石・岡本（2009）の研究結果より未来展望も同様に高いのではないかと推測でき、対照的に、喚起後ネガティブ群はレジリエンスが低く未来展望も同様に低いのではないかと推測できる。また、レジリエンスと未来展望双方が一番高くなるのは、喚起量が多くさらに喚起後ポジティブになる群であると予想される。理由として、喚起後にポジティブになるということは、ノスタルジア喚起により本来性が向上している故である可能性が高く、加えてその頻度が多いことは、自分を振り返る時間や一貫性獲得機会の増加につながる可能性が高いからである。

以上の仮説を踏まえ、青年期の中でも特にノスタルジア喚起の盛んな大学生に対象を絞り、レジリエンス及び時間的展望との関連を検討する。

## 目的

本研究では、大学生の日常におけるノスタルジア喚起量と喚起後気分が、レジリエンス及び時間的展望（特に未来展望）のそれぞれとどのように関連するのかについて検討する。

## 方法

### 調査時期

2020年11月7日から11月14日までの、計7日間実施した。

### 調査参加者

関東の私立大学に在籍している男女91名（うち男性39名、女性52名）を対象に、オンライン上で調査を実施した。回答の不備はなかったため、統計学的には得られた全員分のデータを用いた。この調査の平均年齢は21.59歳、標準偏差は0.77歳であった。また、男性の平均年齢は21.69歳、標準偏差は0.80歳であり、女性の平均年齢は21.52歳、標準偏差は0.75歳であった。

### 質問紙

以下の質問紙を作成し、調査を実施した。質問紙はインフォームド・コンセントの役割を担う教示文と、性別と年齢を記述してもらうフェイスクートシートに加え、後述した3つの尺度から構成された。

**Southampton Nostalgia Scale (SNS) 日本語版** 個人の日常におけるノスタルジアの喚起量を測定するために使用した。Routledgeが作成した尺度を長峯・外山（2019）が日本語に翻訳したもので、全5項目から構成される。信頼性については、項目1「あなたは、どのくらいの頻度でノスタルジアを経験しますか」（ $\alpha = .93$ ）、項目2「あなたはどのくらい、ノスタルジックな気持ちになりがちですか」（ $\alpha = .94$ ）、項目3「一般的に、あなたはどのくらいの頻度でノスタルジックな経験を思い出しますか」（ $\alpha = .93$ ）、項目4「具体的に、あなたはどのくらいの頻度でノスタ

ルジックな経験を思い出しますか」 ( $\alpha = .84$ ), 項目 5 「ノスタルジックな経験を思い出すことは, あなたにとってどのくらい重要ですか」 ( $\alpha = .62$ ) と十分な値が得られ, 高い内的整合性が示されている。回答は, 項目 1 に関しては「1:めったに経験しない」から「7:かなり頻繁に経験する」, 項目 2 に関しては「1:全くなリがちでない」から「7:非常になりがちである」, 項目 3 に関しては「1:めったに思い出さない」から「7:かなり頻繁に思い出す」, 項目 4 に関しては「1:年に 1,2 回」から「7:1 日に 1 回」, 項目 5 に関しては「1:全く重要でない」から「7:非常に重要である」というようにそれぞれに対して 7 件法で尋ねた。加えて, ノスタルジア喚起後気分を測定するため, 独自に「ノスタルジックな経験を思い出した後, あなたは一般的にどのような気持ちになりますか」という質問を設け, 「1:ネガティブな気持ちになる」から「7:ポジティブな気持ちになる」の 7 件法で尋ねた。教示文は「次の各質問について, 下記の注意書きをよく読んだうえで, 自分にもっともよく当てはまるとおもう数字をそれぞれ選択してください」とした。注意書きには, 調査参加者が「ノスタルジア」という言葉を知らない可能性を考慮し, 項目の提示前に定義的な説明として「※ノスタルジア=ある過去の出来事を懐かしく感じ, 感傷的 (センチメンタル) な気持ちになること」と記した。

**レジリエンス尺度** 個人のレジリエンスについて測定するために使用した。石毛・無藤 (2005) が作成したもので, ネガティブな心理状態を立て直すために他者との関係を基盤にしようとする心性を表す「関係志向性」(6 項目), 自分の判断や行動を見直そうとする心性である「内省性」(7 項目), 物事をポジティブに考える傾向を表す「楽観性」(4 項目), 困難に対して音を上げず自ら取り組もうとする態度である「遂行性」(4 項目) の 4 つの下位尺度, 計 21 項目から構成される。各下位尺度の

信頼性は「関係志向性」( $\alpha = .86$ )、「内省性」( $\alpha = .77$ )、「楽観性」( $\alpha = .75$ )、「遂行性」( $\alpha = .78$ )と比較的高い整合性が確認されている。回答は、「1:全く当てはまらない」から「4:よく当てはまる」の4件法であった。

**時間的展望体験尺度** 個人の時間的展望、特に未来展望を測定するために使用した。白井（1994;1997）が作成したもので、「未来指向性」（9項目）、「現在充実」（4項目）、「過去受容」（5項目）の3つの下位尺度、計18項目から構成される。各下位尺度の信頼性は「未来指向性」( $\alpha = .90$ )、「現在充実」( $\alpha = .81$ )、「過去受容」( $\alpha = .74$ )と十分な数値が得られ、内的整合性が示されている。回答は、「1:全く当てはまらない」から「5:とても当てはまる」の5件法であった。

## 手続き

インターネット上の、無料でアンケート作成が可能なGoogleフォーム（Google社）にて上述した質問紙を作成し、サイトのURLを参加者に送信し回答してもらうことで調査を実施した。

## 倫理的配慮

質問紙調査を実施するにあたり、調査参加者に対して、調査への参加は任意であり、参加の可否や回答の有無によって参加者自身に不利益が生じることは無いと伝えた。調査自体は匿名で行う上、本調査以外の目的では使用しないことを明記した。また、得られたデータは数値化されたのち統計処理されるため個人が特定されることはないこと、調査データは調査者が厳重に管理するため個人情報の外部漏洩はないことを示し、同意を得られた参加者に対して調査を実施した。

## 結果

本研究では、大学生の日常におけるノスタルジア喚起量と喚起後気分が、レジリエンス及び時間的展望（特に未来展望）のそれぞれとどのように関連するのかについて検討した。

### 記述統計

まず、大学生 91 名から得られた回答において、各尺度を構成する因子ごとの項目平均と標準偏差について、全体・男性・女性のそれぞれを算出した（Table 1）。なお、時間的展望尺度に逆転項目があったため、分析開始前に SPSS 内で処理を施した。

Table 1

#### 各尺度の平均値と標準偏差

	全体 (n=91)		男性 (n=39)		女性 (n=52)		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
ノスタルジア	喚起量	4.14	1.58	3.93	1.59	4.30	1.58
	重要度	4.32	1.72	4.21	1.88	4.40	1.61
	喚起後気分	4.21	1.65	4.33	1.63	4.21	1.68
レジリエンス	関係志向性	3.17	0.91	3.01	0.97	3.29	0.84
	内省性	3.34	0.75	3.30	0.80	3.36	0.72
	楽観性	2.73	0.97	2.84	1.02	2.64	0.93
	遂行性	2.95	0.82	2.94	0.89	2.96	0.77
時間的展望	未来指向性	3.29	1.27	3.24	1.30	3.33	1.24
	現在充実	3.25	1.23	3.11	1.19	3.35	1.26
	過去愛容	2.72	1.24	2.66	1.29	2.77	1.19

### 相関分析

ノスタルジア喚起量とレジリエンス及び時間的展望との関連を検討するために、全体と男女別の相関分析を行った（Table 2, Table 3, Table 4）。その結果、全体における「喚起量」は、「レジリエンス」との相関はみられなかったが、「時間的展望」とは弱い負の相関 ( $r = -.21, p < .05$ ) が

みられた。男性における「喚起量」は、「レジリエンス」との相関はみられず、「時間的展望」とは弱い負の相関 ( $r = -.39, p < .05$ ) がみられた。女性における「喚起量」は、「レジリエンス」と「時間的展望」の双方とも相関はみられなかった。また、「レジリエンス」と「時間的展望」との間には、全体においては中程度の相関 ( $r = .51, p < .01$ )、男性においても中程度の相関 ( $r = .49, p < .01$ )、女性においても中程度の正の相関 ( $r = .56, p < .01$ ) がみられた。

Table 2

全体における喚起量と、レジリエンス及び時間的展望との相関

	喚起量	レジリエンス	時間的展望
喚起量	-	.01	-.21*
レジリエンス		-	.51**
時間的展望			-

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 3

男性における喚起量と、レジリエンス及び時間的展望との相関

	喚起量	レジリエンス	時間的展望
喚起量	-	-.77	-.39*
レジリエンス		-	.49**
時間的展望			-

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 4

女性における喚起量と、レジリエンス及び時間的展望との相関

	喚起量	レジリエンス	時間的展望
喚起量	-	.07	-.10
レジリエンス		-	.56**
時間的展望			-

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

同様に、ノスタルジア喚起後気分と、レジリエンス及び時間的展望との関連を検討するために、全体と男女別の相関分析を行った（Table 5, Table 6, Table 7）。その結果、全体における「喚起後気分」と「レジリエンス」との間には、弱い正の相関（ $r = .26, p < .05$ ）がみられ、「時間的展望」との間には中程度の正の相関（ $r = .41, p < .01$ ）がみられた。男性における「喚起後気分」は、「レジリエンス」との相関はみられなかつたが、「時間的展望」との間には弱い正の相関（ $r = .38, p < .05$ ）がみられた。また、女性における「喚起後気分」と「レジリエンス」との間には弱い正の相関（ $r = .33, p < .01$ ）がみられ、「時間的展望」との間には中程度の正の相関（ $r = .43, p < .01$ ）がみられた。

Table 5

全体における喚起後気分と、レジリエンス及び時間的展望との相関

	喚起後気分	レジリエンス	時間的展望
喚起量後気分	-	.26*	.41**
レジリエンス		-	.51**
時間的展望			-

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 6

男性における喚起後気分と、レジリエンス及び時間的展望との相関

	喚起後気分	レジリエンス	時間的展望
喚起量後気分	-	.21	.38*
レジリエンス		-	.49**
時間的展望			-

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 7

女性における喚起後気分と、レジリエンス及び時間的展望との相関

	喚起後気分	レジリエンス	時間的展望
喚起量後気分	-	.33*	.43**
レジリエンス	-		.56**
時間的展望	-		-

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

次に、ノスタルジア喚起量とノスタルジア喚起後気分が、レジリエンスと時間的展望を構成する因子ごとの項目にどのように関連しているかを検討するため、相関分析を行った(Table 8)。なお、「喚起量」とはSNSにおける項目1から項目4までの4因子で構成され、「重要度」はSNSにおける項目5、「喚起後気分」は独自で作成した1項目で構成されている。

Table 8

ノスタルジア喚起量及び喚起後気分と各尺度の相関

	喚起量	重要度	喚起後気分	関係志向性	内省性	楽観性	遂行性	未来指向性	現在充実	過去受容
喚起量	-	.57**	-.06	.08	.49**	-.19	.05	-.10	-.22*	-.30**
重要度	-		.06	.14	.28**	-.14	.21*	-.09	-.24*	-.19
喚起後気分	-			.04	.04	.34**	.29**	.31**	.32*	.41**
関係志向性	-			-	.24*	.01	.33**	.16	.18	.05
内省性	-			-		-.00	.42**	.21*	.20	-.07
楽観性	-			-			.31**	.55**	.49**	.33**
遂行性	-			-			-	.46**	.34**	.08
未来指向性	-			-			-		.60**	.36**
現在充実	-			-			-	-		.45**
過去受容	-			-			-	-	-	-

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 8より、1つ目に、「喚起量」と「重要度」( $r = .57, p < .01$ )、「内省性」( $r = .42, p < .01$ )との間に中程度の正の相関がみられ、「現在充実」( $r = -.22, p < .05$ )、「過去受容」( $r = -.30, p < .01$ )との間に弱い負の相関がみられた。「喚起後気分」、「関係志向性」、「楽観性」、「遂行性」、「未来指向

性」とは相関がみられなかった。2つ目に、「重要度」と「内省性」( $r=.28$ ,  $p<.01$ ), 「遂行性」( $r=.21$ ,  $p<.05$ )との間に弱い正の相関がみられ、「現在充実」( $r=-.24$ ,  $p<.05$ )との間に弱い負の相関がみられた。「喚起後気分」, 「関係志向性」, 「楽観性」, 「未来指向性」, 「過去受容」とは相関がみられなかった。3つ目に, 「喚起後気分」と「楽観性」( $r=.34$ ,  $p<.01$ ), 「遂行性」( $r=.29$ ,  $p<.01$ ), 「未来指向性」( $r=.31$ ,  $p<.01$ ), 「現在充実」( $r=.32$ ,  $p<.05$ )との間に弱い正の相関, 「過去受容」( $r=.41$ ,  $p<.01$ )との間に中程度の正の相関がみられた。「関係志向性」, 「内省性」とは相関がみられなかった。4つ目に, 「関係志向性」と「内省性」( $r=.24$ ,  $p<.05$ ), 「遂行性」( $r=.33$ ,  $p<.01$ )との間に弱い正の相関がみられたが, 「楽観性」, 「未来指向性」, 「現在充実」, 「過去受容」との間には相関がみられなかった。5つ目に, 「内省性」と「遂行性」( $r=.42$ ,  $p<.01$ )との間に中程度の正の相関, 「未来指向性」( $r=.21$ ,  $p<.05$ )との間に弱い正の相関がみられたが, 「楽観性」, 「現在充実」, 「過去受容」との間には相関がみられなかった。6つ目に, 「楽観性」と「遂行性」( $r=.31$ ,  $p<.01$ ), 「過去受容」( $r=.33$ ,  $p<.01$ )との間に弱い正の相関がみられたうえ, 「未来指向性」( $r=.55$ ,  $p<.01$ ), 「現在充実」( $r=.49$ ,  $p<.01$ )との間にも中程度の正の相関がみられた。7つ目に, 「遂行性」と「未来指向性」( $r=.46$ ,  $p<.01$ )との間に中程度の正の相関がみられたが, 「過去受容」との相関はみられなかった。8つ目に, 「未来指向性」と「現在充実」( $r=.60$ ,  $p<.01$ )との間に中程度の正の相関, 「過去受容」( $r=.36$ ,  $p<.01$ )との間に弱い正の相関がみられた。最後に, 「現在充実」と「過去受容」( $r=.45$ ,  $p<.01$ )との間に中程度の正の相関がみられた。

## 重回帰分析

ノスタルジア喚起量及び喚起後気分が、レジリエンスと時間的展望に及ぼす影響を検討するため重回帰分析を行った。分析を行う前に、ノスタルジア喚起量高群と低群、喚起後気分ポジティブ群とネガティブ群、双方を掛け合わせた計4群（HP群、HN群、LP群、LN群）に分類した（Table 9）。分類方法は、SNS内にある喚起量を測定する4項目の平均値4.14を基準として、平均値が4.14以上だった調査参加者を喚起量高群、それ以外を喚起量低群とした。また、独自に設けた喚起後気分を測定する1項目の平均値4.21を基準として、4.21を上回った調査参加者を喚起後ポジティブ群、それ以外を喚起後ネガティブ群とした。

Table 9

ノスタルジア喚起量及び喚起後の気分の群分け

ノスタルジア喚起量	ノスタルジア喚起後気分	
	ポジティブ	ネガティブ
高	40名	17名
低	8名	26名

**喚起量高・喚起後ポジティブ群（HP群）における重回帰分析** まず、喚起量高・喚起後ポジティブ群（HP群）にてレジリエンスとの重回帰分析を行った結果（Figure 1）、「関係志向性」において有意な影響がみられなかった（ $R^2 = -.03$ ； 嘚起量；  $b = -.19$ ,  $SE = .22$ ,  $\beta = .14$ ,  $t(40) = .85$ ,  $p = .40$ ； 嘚起後気分；  $b = -.02$ ,  $SE = .35$ ,  $\beta = -.01$ ,  $t(40) = -.07$ ,  $p = .95$ ）。「内省性」においても有意な影響はみられなかった（ $R^2 = .00$ ； 嘚起量；  $b = -.13$ ,  $SE = .20$ ,  $\beta = -.11$ ,  $t(40) = -.63$ ,  $p = .31$ ； 嘚起後気分；  $b = .34$ ,  $SE = .32$ ,  $\beta = .18$ ,  $t(40) = 1.07$ ,  $p = .29$ ）。「楽観性」において、「喚起量」での有意な影響は

みられなかったが ( $R^2 = .08$  ; 嘘起量;  $b = -.04$ ,  $SE = .19$ ,  $\beta = -.03$ ,  $t(40) = -.22$ ,  $p = .83$ ), 「喘起後気分」では有意な影響が予測された (喘起後気分;  $b = .66$ ,  $SE = .30$ ,  $\beta = .35$ ,  $t(40) = 2.19$ ,  $p = .04$ )。「遂行性」において有意な影響はみられなかった ( $R^2 = -.01$  ; 嘘起量;  $b = -.00$ ,  $SE = .14$ ,  $\beta = .01$ ,  $t(40) = -.03$ ,  $p = .97$  ; 嘘起後気分;  $b = .25$ ,  $SE = .22$ ,  $\beta = .19$ ,  $t(40) = 1.15$ ,  $p = .26$ )。

同様に, 時間的展望との重回帰分析を行った結果 (Figure 2), 「未来指向性」において有意な影響が予測されたが ( $R^2 = .46$  ; 嘘起量;  $b = .32$ ,  $SE = .27$ ,  $\beta = .42$ ,  $t(40) = 2.61$ ,  $p = .02$  ; 嘘起後気分;  $b = .49$ ,  $SE = .31$ ,  $\beta = .37$ ,  $t(40) = 2.08$ ,  $p = .03$ ), 「現在充実」においては有意な影響がみられなかった ( $R^2 = .08$  ; 嘘起量;  $b = -.16$ ,  $SE = .23$ ,  $\beta = -.11$ ,  $t(40) = -.72$ ,  $p = .48$  ; 嘘起後気分;  $b = .72$ ,  $SE = .37$ ,  $\beta = .31$ ,  $t(40) = 1.96$ ,  $p = .20$ )。「過去受容」において,「喘起量」では有意な影響がみられなかったが ( $R^2 = .12$  ; 嘘起量;  $b = -.03$ ,  $SE = .24$ ,  $\beta = -.02$ ,  $t(40) = -.12$ ,  $p = .91$ ), 「喘起後気分」では有意な影響が予測された (喘起後気分;  $b = .95$ ,  $SE = .38$ ,  $\beta = .40$ ,  $t(40) = 2.53$ ,  $p = .01$ )。

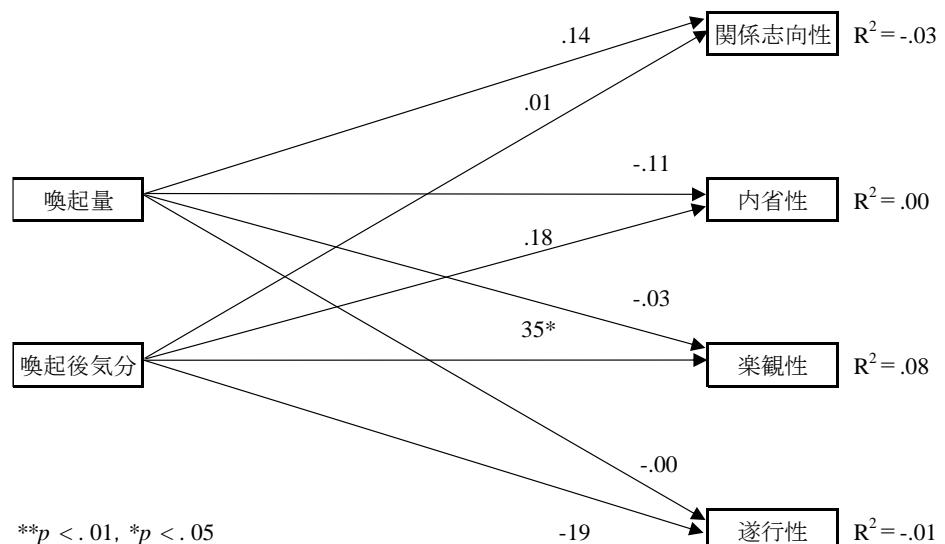


Figure 1. HP 群におけるレジリエンスとの重回帰分析の結果

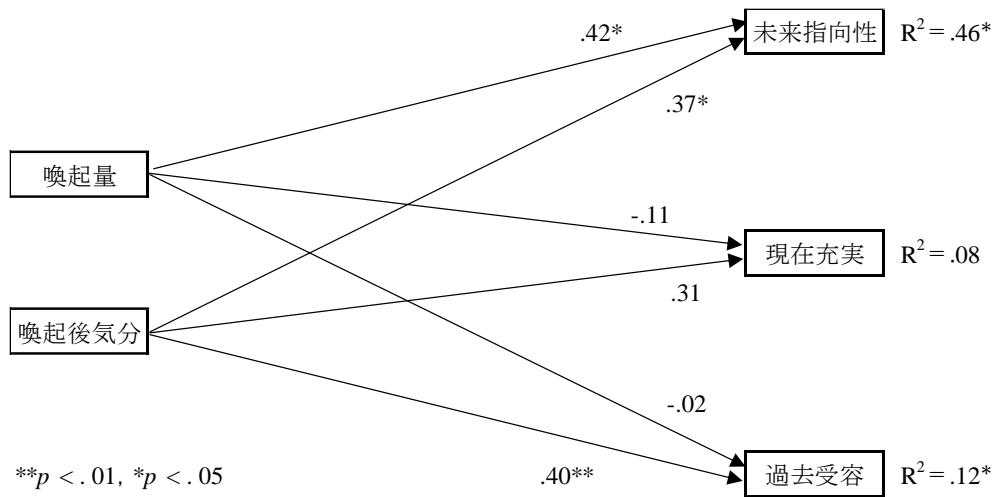


Figure 2. HP 群における時間的展望との重回帰分析の結果

**喚起量高・喚起後ネガティブ群 (HN 群) における重回帰分析** 嘚起量高・喚起後ネガティブ群 (HN 群) にてレジリエンスとの重回帰分析を行った結果 (Figure 3), 「関係志向性」において有意な影響がみられなかったうえ, ( $R^2 = -.02$ ; 嘚起量;  $b = -.44$ ,  $SE = .43$ ,  $\beta = -.26$ ,  $t(17) = -1.02$ ,  $p = .33$ ; 嘚起後気分;  $b = .56$ ,  $SE = .72$ ,  $\beta = .20$ ,  $t(17) = .77$ ,  $p = .45$ ), 「内省性」においても有意な影響はみられなかった ( $R^2 = -.01$ ; 嘚起量;  $b = .28$ ,  $SE = .31$ ,  $\beta = .23$ ,  $t(17) = .89$ ,  $p = .39$ ; 嘚起後気分;  $b = -.37$ ,  $SE = .53$ ,  $\beta = -.18$ ,  $t(17) = -.70$ ,  $p = .50$ )。「楽観性」において, 「喚起量」での有意な影響はみられなかったが ( $R^2 = .44$ ; 嘚起量;  $b = -.13$ ,  $SE = .20$ ,  $\beta = -.13$ ,  $t(17) = -.66$ ,  $p = .52$ ), 「喚起後気分」では有意な影響が予測された (喚起後気分;  $b = -1.16$ ,  $SE = .34$ ,  $\beta = -.66$ ,  $t(17) = -3.38$ ,  $p = .00$ )。「遂行性」においても有意な影響が予測された ( $R^2 = .34$ ; 嘚起量;  $b = -.36$ ,  $SE = .16$ ,  $\beta = -.47$ ,  $t(17) = -2.18$ ,  $p = .04$ ; 嘚起後気分;  $b = -.43$ ,  $SE = .28$ ,  $\beta = -.36$ ,  $t(17) = -2.21$ ,  $p = .05$ )。

同様に, 時間的展望との重回帰分析を行った結果 (Figure 4), 「未来指

向性」において有意な影響が予測された ( $R^2 = .53$  ; 嘘起量 ;  $b = -1.03$ ,  $SE = .25$ ,  $\beta = -.45$ ,  $t(17) = -2.21$ ,  $p = .03$  ; 嘘起後気分 ;  $b = -3.89$ ,  $SE = 1.08$ ,  $\beta = -.71$ ,  $t(17) = -3.61$ ,  $p = .00$ )。「現在充実」において、「嘘起量」では有意な影響がみられなかつたが ( $R^2 = .26$  ; 嘴起量 ;  $b = .33$ ,  $SE = .32$ ,  $\beta = .24$ ,  $t(17) = 1.05$ ,  $p = .31$ ), 「嘘起後気分」では有意な影響が予測された (嘘起後気分 ;  $b = -1.48$ ,  $SE = .54$ ,  $\beta = -.62$ ,  $t(17) = -2.75$ ,  $p = .01$ )。「過去受容」において、「嘘起量」では有意な影響がみられなかつたが ( $R^2 = .41$  ; 嘴起量 ;  $b = -.08$ ,  $SE = .33$ ,  $\beta = -.05$ ,  $t(17) = .25$ ,  $p = .81$ ), 「嘘起後気分」では有意な影響が予測された (嘘起後気分 ;  $b = -1.89$ ,  $SE = .56$ ,  $\beta = -.68$ ,  $t(17) = -3.39$ ,  $p = .00$ )。

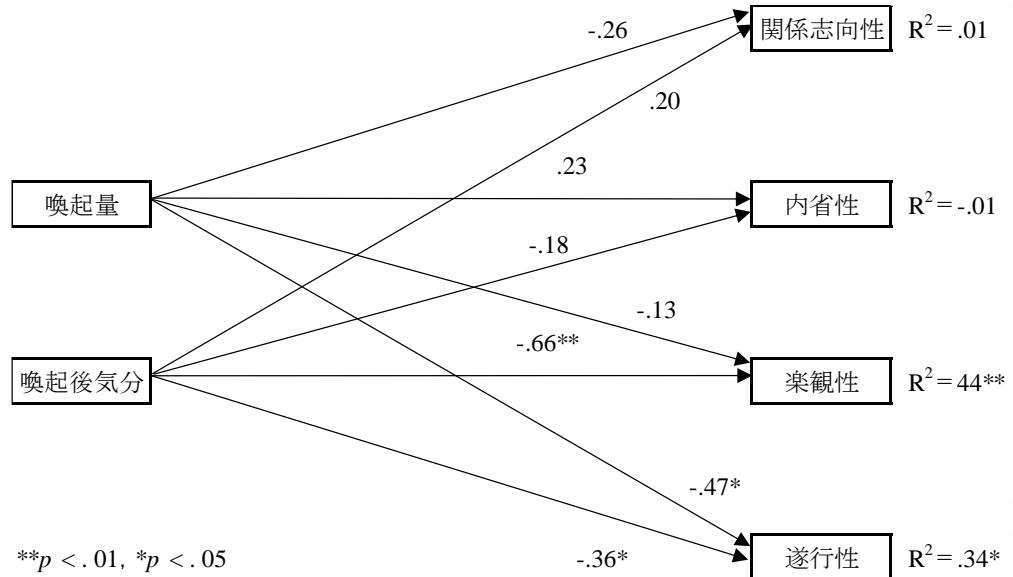


Figure 3. HN 群におけるレジリエンスとの重回帰分析の結果

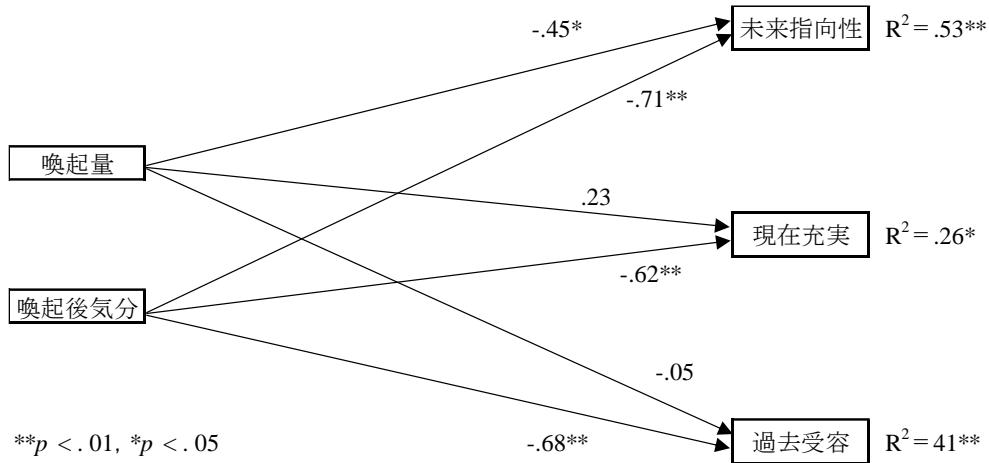


Figure 4. HN 群における時間的展望との重回帰分析の結果

**喚起量低・喚起後ポジティブ群 (LP 群) における重回帰分析** 嘚起量低・喚起後ポジティブ群 (LP 群) にてレジリエンスとの重回帰分析を行った結果 (Figure 5), 「関係志向性」 ( $R^2 = .11$  ; 嘚起量 ;  $b = -.44$ ,  $SE = .44$ ,  $\beta = -.41$ ,  $t(8) = -1.01$ ,  $p = .36$  ; 嘚起後気分 ;  $b = -.34$ ,  $SE = .92$ ,  $\beta = -.15$ ,  $t(8) = -.37$ ,  $p = .72$ ), 「内省性」 ( $R^2 = .11$  ; 嘚起量 ;  $b = -.30$ ,  $SE = .41$ ,  $\beta = -.29$ ,  $t(8) = -.73$ ,  $p = .50$  ; 嘚起後気分 ;  $b = .85$ ,  $SE = .86$ ,  $\beta = .40$ ,  $t(8) = .99$ ,  $p = .37$ ), 「楽観性」 ( $R^2 = .28$  ; 嘚起量 ;  $b = -.29$ ,  $SE = .47$ ,  $\beta = -.27$ ,  $t(8) = -.62$ ,  $p = .57$  ; 嘚起後気分 ;  $b = .42$ ,  $SE = .97$ ,  $\beta = .19$ ,  $t(8) = .44$ ,  $p = .68$ ), 「遂行性」 ( $R^2 = .05$  ; 嘚起量 ;  $b = -.23$ ,  $SE = .38$ ,  $\beta = -.24$ ,  $t(8) = -.61$ ,  $p = .57$  ; 嘚起後気分 ;  $b = .97$ ,  $SE = .79$ ,  $\beta = .48$ ,  $t(8) = 1.22$ ,  $p = .28$ ) と, どの要因でも有意な影響はみられなかった。

同様に, 時間的展望との重回帰分析を行った結果 (Figure 6), 「未来指向性」 ( $R^2 = .37$  ; 嘚起量 ;  $b = -.56$ ,  $SE = 1.75$ ,  $\beta = -.14$ ,  $t(8) = -.32$ ,  $p = .76$  ; 嘚起後気分 ;  $b = .34$ ,  $SE = 3.66$ ,  $\beta = .04$ ,  $t(8) = .09$ ,  $p = .93$ ), 「現在充実」 ( $R^2 = .11$  ; 嘚起量 ;  $b = -.48$ ,  $SE = .39$ ,  $\beta = -.44$ ,  $t(8) = -1.22$ ,  $p = .28$  ; 嘚起後気分 ;  $b = -.78$ ,  $SE = .82$ ,  $\beta = -.34$ ,  $t(8) = -.95$ ,  $p = .39$ ), 「過去受容」 ( $R^2$

$= -.15$  ; 喚起量 ;  $b = .10$ ,  $SE = .31$ ,  $\beta = .14$ ,  $t(8) = .33$ ,  $p = .75$  ; 喚起後気分 ;  $b = -.67$ ,  $SE = .64$ ,  $\beta = -.43$ ,  $t(8) = -1.04$ ,  $p = .35$ )

どの要因でも有意な影響はみられなかった。

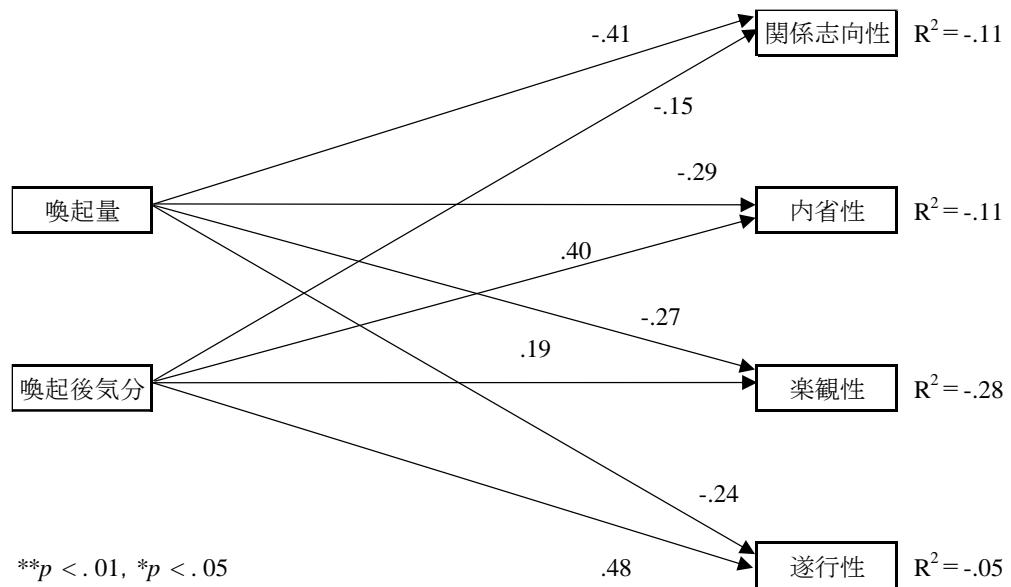


Figure 5. LP 群におけるレジリエンスとの重回帰分析の結果

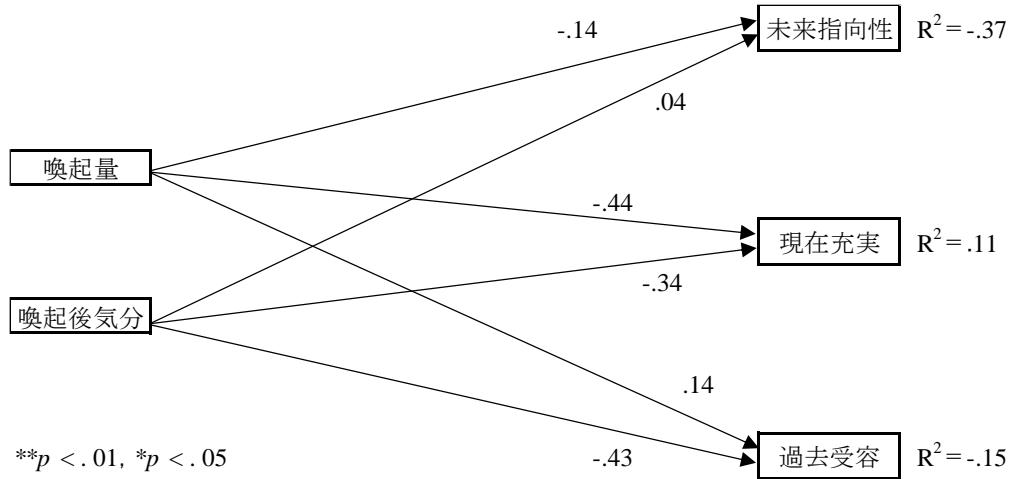


Figure 6. LP 群における時間的展望との重回帰分析の結果

## 喚起量低・喚起後ネガティブ群（LN群）における重回帰分析 嘚起

量低・喚起後ネガティブ群（LN群）にてレジリエンスとの重回帰分析を行った結果（Figure 7）、「関係志向性」において有意な影響はみられなかった（ $R^2 = -.07$ ；喚起量； $b = .13$ ,  $SE = .25$ ,  $\beta = .11$ ,  $t(26) = .54$ ,  $p = .60$ ；喚起後気分； $b = .01$ ,  $SE = .55$ ,  $\beta = .00$ ,  $t(26) = .02$ ,  $p = .99$ ）。「内省性」においても有意な影響はみられなかった（ $R^2 = -.06$ ；喚起量； $b = .17$ ,  $SE = .22$ ,  $\beta = -.16$ ,  $t(26) = -.78$ ,  $p = .44$ ；喚起後気分； $b = .01$ ,  $SE = .55$ ,  $\beta = .00$ ,  $t(26) = -.28$ ,  $p = .78$ ）。「楽観性」において、「喚起量」では有意な影響が予測されたが（ $R^2 = .18$ ；喚起量； $b = -.46$ ,  $SE = .17$ ,  $\beta = -.48$ ,  $t(26) = -2.66$ ,  $p = .01$ ）、「喚起後気分」では有意な影響はみられなかった（喚起後気分； $b = .14$ ,  $SE = .39$ ,  $\beta = .06$ ,  $t(26) = -.28$ ,  $p = .78$ ）。「遂行性」においては、「喚起量」では有意な影響はみられず（ $R^2 = -.07$ ；喚起量； $b = -.04$ ,  $SE = .12$ ,  $\beta = -.06$ ,  $t(26) = -.29$ ,  $p = .78$ ）。「喚起後気分」においても同じく有意な影響はみられなかった（喚起後気分； $b = .13$ ,  $SE = .28$ ,  $\beta = .10$ ,  $t(26) = .47$ ,  $p = .65$ ）。

同様に、時間的展望との重回帰分析を行った結果（Figure 8）、「未来指向性」において、「喚起量」では有意な影響がみられなかったが（ $R^2 = .07$ ；喚起量； $b = .15$ ,  $SE = .44$ ,  $\beta = .07$ ,  $t(26) = .35$ ,  $p = .73$ ）、「喚起後気分」では有意な影響が予測された（喚起後気分； $b = -1.90$ ,  $SE = .97$ ,  $\beta = -.38$ ,  $t(26) = -1.95$ ,  $p = .04$ ）。「現在充実」において、「喚起量」で有意な影響が予測され（ $R^2 = .32$ ；喚起量； $b = -.40$ ,  $SE = .15$ ,  $\beta = -.44$ ,  $t(26) = -2.68$ ,  $p = .01$ ）、「喚起後気分」においても同じく有意な影響が予測された。（喚起後気分； $b = -.79$ ,  $SE = .33$ ,  $\beta = -.39$ ,  $t(26) = -2.36$ ,  $p = .03$ ）。「過去受容」において、「喚起量」では有意な影響がみられなかったが（ $R^2 = .08$ ；喚起量； $b = -.08$ ,  $SE = .21$ ,  $\beta = -.07$ ,  $t(26) = -.36$ ,  $p = .73$ ）、「喚起後気分」では有意な影

響が予測された（喚起後気分； $b = -.93$ ,  $SE = .47$ ,  $\beta = -.38$ ,  $t(26) = -1.96$ ,  $p = .05$ ）。

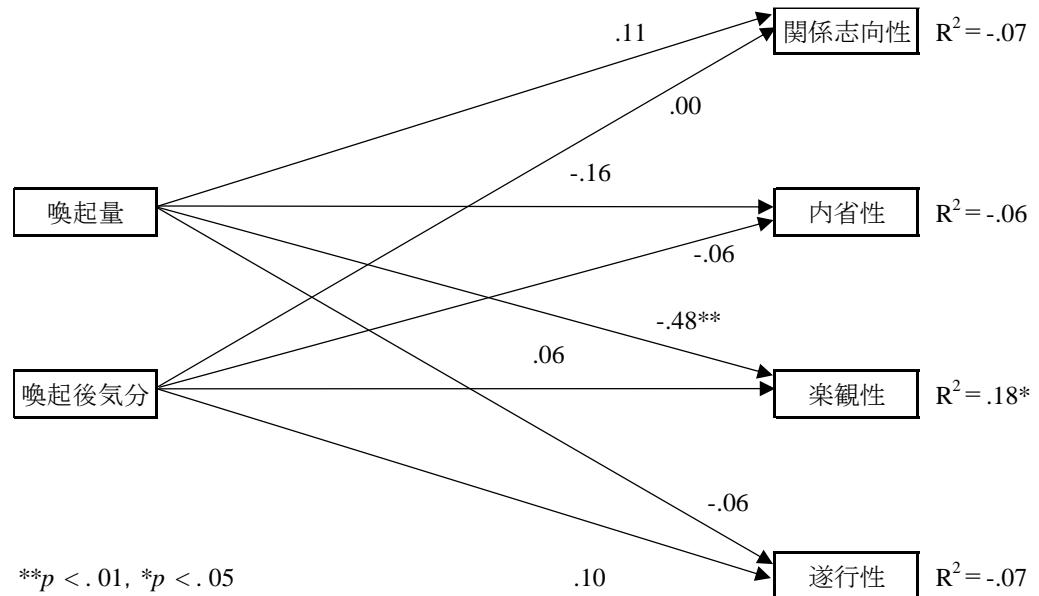


Figure 7. LN 群におけるレジリエンスとの重回帰分析の結果

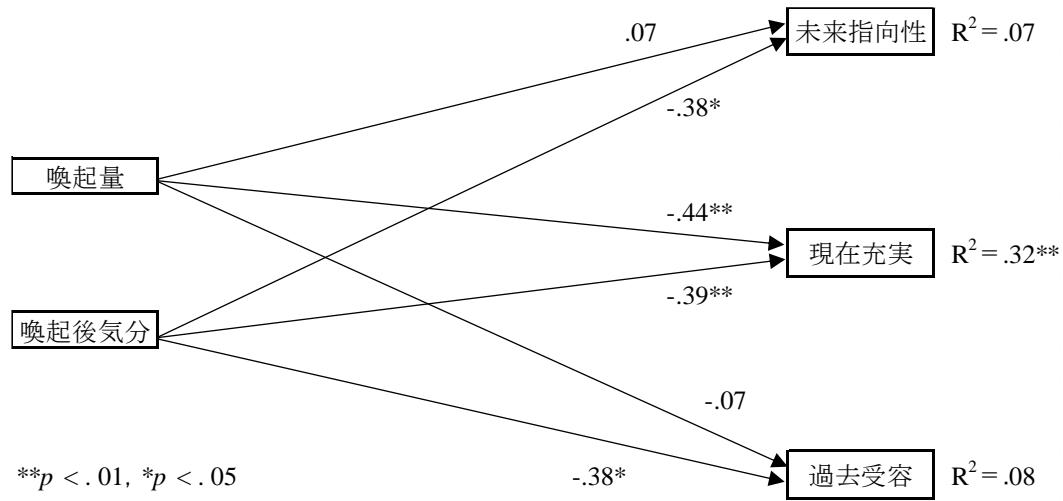


Figure 8. LN 群における時間的展望との重回帰分析の結果

## 考察

本研究では、大学生の日常におけるノスタルジア喚起量と喚起後気分が、レジリエンス及び時間的展望（特に未来展望）のそれぞれと関連するのかについて検討した。

### 相関分析

**全体・男性・女性におけるノスタルジア喚起量と、レジリエンス及び時間的展望との相関** 全体・男性・女性の全てにおいて「喚起量」と「レジリエンス」の間には相関がみられず、「時間的展望」との間には女性を除き弱い負の相関がみられるという結果になった。「レジリエンス」について、問題部分で触れたストレスに対するコーピングとして機能する (Batcho, 2013) という知見や、レジリエンスとノスタルジアに関する Zhou, Sedikides, Wildschut, & Gao (2008) の研究から、喚起量とレジリエンスには相関がみられるという仮説立てをしていたが予想外の結果となつた。Zhou et al.での研究は孤独感という媒介要因ありきで実験がなされており、本研究のように喚起量のみを考慮した内容ではなかつたため、相関が得られなかつたのだと考えられる。「時間的展望」については、喚起量が多ければ多いほど正の影響を与えると仮説立てをしたが、本研究では 5% 水準で有意差が得られ、負の影響を与えるという逆説的な現象がみられた。このような結果になつた理由として、時間的展望とノスタルジアの関連で述べた Cheung, Wildschut, Sedikides, Hepper, Arudt, & Vingerhoest (2013) の研究や長峯・外山 (2019) の研究は、「未来」に関してのみを検討していたが、本研究で使用した時間的展望体験尺度には「現在」と「過去」に関する質問項目が含まれていたため差異が生じ

たと推測される。また、今回行った相関分析は喚起量の高低が与える影響のみを検討したものであり、調査参加者自身が喚起したノスタルジアの内容やその後の気分を考慮していなかったことも要因の1つとして挙げられる。なお、正の相関ではなく負の相関がみられた理由は、のちほど重回帰分析の考察部分で詳細に述べる。

補足的な検討となるが、「レジリエンス」と「時間的展望」に関しては、全体・男性・女性の全てにおいて1%水準で有意差が得られ、正の影響を与えていていることが判明した。つまり、レジリエンスが高ければ高いほど、過去・現在・未来に対して肯定的な態度を示しているということになる。この結果は、勝俣（1995）が構造化したリボンモデルに加え、青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連を検討した大石・岡本（2009）の研究結果を支持するものとなった。個人のレジリエンス能力を高めることで、過去への受容が出来たり、現在への充実感が得られたり、未来への希望が高まったりとプラスな効果が現れると結論付けられるであろう。

**全体・男性・女性におけるノスタルジア喚起後気分と、レジリエンス及び時間的展望との相関** 全体・女性において「喚起後気分」と「レジリエンス」に相関がみられ、男性においては相関がみられなかった。また、「時間的展望」との間には全体・男性・女性の全てにおいて相関がみられるという結果になった。「レジリエンス」について、男性を除き5%水準で有意差が得られ、正の影響を与えていることが分かった。この結果は、喚起後気分がポジティブになればなるほどレジリエンスも高くなるということを示しており、仮説を一部支持した。冒頭の問題部分で述べたように、ノスタルジアが持つ4つの適応的機能の中には「ポジティ

プ感情」が含まれているため、懐かしい経験の想起により立ち直りや自己への見直しに繋がったのだと考察できる。女性では得られた有意差が男性では得られなかつた理由としては、各尺度の平均値と標準偏差（Table 1）に呈示された「喚起量」と「重要度」の平均値、そして「レジリエンス」の総合的な平均値が男性よりも女性の方が高くなっているためではないかと考えられる。また、浅沼（2012）の見解で、女性においては受容経験の及ぼす影響が大きいとされていること、女性の方が思い出に浸りやすい傾向があることから、そもそも女性の方がノスタルジアに関する影響が全般的に高い可能性がある。「時間的展望」については、全体・女性において 1% 水準、男性において 5% 水準で有意差が得られ、正の影響を与えていたことが判明した。つまり、喚起後気分がポジティブになればなるほど時間的展望も高くなるということである。仮説の部分では未来展望のみを言及していたが、過去・現在・未来という側面から影響がみられたということは新たな知見の獲得といえるだろう。

**ノスタルジア喚起量及び喚起後気分と各尺度の相関** まず、「ノスタルジア喚起量」と各下位尺度との相関をみてみると（Table 8）、「重要度」との間に中程度の正の相関、「現在充実」と「過去受容」との間に弱い負の相関がみられた。ノスタルジア喚起量が「重要度」に正の影響を与えていたということは、喚起量が多ければ多いほど、個人にとって懐かしい出来事を思い出すことが重要であるということになる。逆を返せば、ノスタルジアの想起が重要でなければならない人ほど、喚起量が少なくなるという事実は至極当然のようにも思える。「現在充実」と「過去受容」との間に負の相関がみられたのは、後述する重回帰分析でも考察されていくように、喚起量単体の影響ではなく想起したノスタルジア自体の内容

や、喚起後の気分という他要因によって得られた結果であると考えられる。次に、「ノスタルジア重要度」は「内省性」と「遂行性」というレジリエンスの下位尺度との間に弱い正の相関がみられ、喚起量と同様に「現在充実」との間に弱い負の相関がみられた。自分を見つめなおす行為や原因を探る行為は過去を振り返ることそのものであり、諦めずに挑戦する精神や実行力は過去の成功体験から得られている可能性が高いため、ノスタルジア想起の重要度に影響を与えているのだと考えられる。そして、「ノスタルジア喚起後気分」は「楽観性」、「遂行性」、「未来指向性」、「現在充実」との間に弱い正の相関、「過去受容」との間に中程度の正の相関がみられた。喚起後ポジティブになる人ほど、楽観的に物事を考えられる度合いが高くなることが伺える。また、喚起後気分は時間的展望全般にも正の影響を与えていていることから、ポジティブになればなるほど、過去・現在・未来を通して肯定的な態度を示していることになり、前述した相関分析でも取り上げた Cheung et al.の研究（2013）を支持する結果となった。

また、補足的な検討となるが、「レジリエンス」の下位尺度である「関係指向性」、「内省性」、「楽観性」、「遂行性」は同尺度内の因子それぞれに正の影響を与えている場合が多く、「時間的展望」ともおおむね有意差が得られている。中でも「楽観性」は「時間的展望」全般への影響が強く、先行研究の知見を大いに支持するものとなった。「時間的展望」の下位尺度である「未来指向性」、「現在充実」、「過去受容」も同様に相互作用が働いており、過去・現在・未来は切り離されたものではなく一貫性を持った概念だというリボンモデルに強く当てはまった結果であるといえる。

## 重回帰分析

### HP 群・HN 群・LP 群・LN 群におけるレジリエンスとの重回帰分析

まず HP 群に関して、「喚起後気分」は「楽観性」において 5% 水準で有意な正の影響が予測され、それ以外での有意な影響は予測されなかった。ポジティブな気分になるノスタルジアを思い出す頻度が高くなる故に、楽観性向上に繋がっているのだと考えられる。しかしながら、関係志向性や内省性への影響はみられず、Sedikides, Wildschut, Gaertner, Routledge, & Arndt (2008) が述べた「社会的絆の強化」や「人生への意味付け」に相当する要因との関連が得られなかったことは仮説に反する結果となった。次に HN 群に関して、「喚起量」は「楽観性」において 1% 水準で有意な負の影響が予測され、「遂行性」においても 5% 水準で有意な負の影響が予測された。また、「喚起後気分」は「遂行性」において 5% 水準で有意な負の影響が予測された。これらの結果を合わせて考察すると、ネガティブな気分になるノスタルジアの喚起量が多ければ多いほど、楽観性や遂行性は下がっていくということである。「楽観性」において、HP 群とは結果が正反対になっていることから、想起したノスタルジアの内容によって湧き上がる感情がその後の要因に影響を与えていていることが理解できる。LP 群では、どの要因でも有意な影響はみられなかった。このような結果になった理由としては、HP 群が 40 名、HN 群が 17 名、LN 群が 26 名と人数が分かれる中、LP 群のみ 8 名と少ないデータ量となつたことが要因の 1 つとして挙げられる。また、そもそも喚起量が少ないと、他要因に影響を与える機会自体が少ないので数値として現れなかった可能性も考えられる。最後に LN 群に関して、「喚起量」は「楽観性」において 1% 水準で有意な負の影響が予測されたが、それ以外での有意な影響は予測されなかった。「遂行性」に関する影響を除けば、HN 群と

同様の影響が予測されることになる。「楽観性」において、HN群では-.66という数値が算出されていたが LN群では-.48と若干ではあるが減少していることからも、喚起量によってネガティブな気持ちになる頻度の差異によって影響が変化することが判明したといえる。

総合的にみて、ノスタルジア喚起量の高低、喚起後気分のポジティブ・ネガティブはレジリエンスとの関連がさほど得られなかつた。しかし、先行研究でも扱われていた「楽観性」との関連が多く見受けられたことから、懐かしい出来事を思い出すことは何事も前向きにとらえる助長となる可能性があるといえる。

**HP群・HN群・LP群・LN群における時間的展望との重回帰分析** まず HP群に関して、「喚起量」は「未来指向性」において 5% 水準で有意な正の影響が予測された。「喚起後気分」は「未来指向性」において 5% 水準で有意な正の影響、「過去受容」においては 1% 水準で有意な正の影響が予測された。つまり、ポジティブな気分になるノスタルジア喚起量が高ければ高いほど、未来に対して希望を持ち肯定的な態度になるということである。この結果は大石・岡本の研究（2009）に加え、長峯・外山（2019）の、ノスタルジアを経験した実験参加者が、そうでない実験参加者よりも未来に対してポジティブな感情を抱いており、ネガティブな感情を抱いていなかつたという知見を支持するものとなつた。次に HN群に関して、「喚起量」は「未来指向性」において 5% 水準で有意な負の影響が予測された。また、「喚起後気分」は「未来指向性」、「現在充実」、「過去受容」と全ての要因に 1% 水準で有意な負の影響が予測された。喚起量については HP群とは正反対の結果になり、喚起後気分は時間的展望の全般に強い負の影響を与えていることが判明した。「あの頃は良か

った」「あの時の大事な人はもういない」というように、ネガティブな気分になるノスタルジアや戻れない過去を多く思い出すことで、未来に対しての希望が薄れてしまうためであると考えられる。また、現在が充実していないが故に過去の記憶に縋ったり、嫌な思い出を自分の中でずっと引きずり過去を否定してしまったりと、負の感情は他要因に大きく影響を与えてしまう場合もあるため、ノスタルジア喚起が多ければ多いほど人間にとて良い影響が得られるわけではないのだとも考察できる。

LP 群では、レジリエンスとの重回帰分析と同様にどの要因でも有意な影響はみられなかった。最後に LN 群に関して、「喚起量」は「現在充実」において 1% 水準で有意な負の影響が予測され、「喚起後気分」は「未来指向性」と「過去受容」において 5% 水準で有意な負の影響、「現在充実」においては 1% 水準で有意な負の影響が予測された。HN 群と同じように、喚起後気分が時間的展望全般に負の影響を与えていることを考慮すると、やはりネガティブな気分になるノスタルジアを思い出すことは、各時制に否定的な態度を生み出す原因になりかねないと結論付けられる。また、HN 群が未来指向性、現在充実、過去受容に与える影響が順に -.71, -.62, -.68 という数値であったのに対し、LN 群は -.38, -.39, -.38 と減少していることから、喚起量が高ければ高いほど影響が強くなるのだということも判明した。

ノスタルジア喚起量が時間的展望に与える影響は見受けられたが、喚起量よりも喚起後気分のポジティブ・ネガティブが他要因に及ぼす影響の方が多く得られた。相関分析の際に喚起量と時間的展望との間に負の相関がみられたのは、ポジティブな気分よりもネガティブな気分になる場合の影響度合いが多かったためであると考えられる。この傾向は群分けをして判明した結果であり、新たな知見獲得といえる。

## 総合考察

これまで述べてきたとおり、ノスタルジア喚起量及び喚起後気分は、レジリエンスや時間的展望と一部関連があるという結果が得られた。個人のノスタルジア喚起量も然りであるが、それ以上にノスタルジア喚起後にどのような気分になるかということが、他要因への影響を左右しているように思われる。過去の懐かしい出来事を思い出すことは、ある人にとっては立ち直りや自己理解に繋がり、過去・現在・未来と一貫して肯定的な態度を持つことが出来る一方、過去にあまり良い思いを抱いておらず、元々抑うつ傾向の高い人はかえって否定的な態度が生まれてしまうのかもしれない。

本調査の問題点、そして今後の課題として挙げられるのは 3 つある。1 つ目は、SNS 尺度日本語版が作成されてから日が浅く、未だノスタルジア喚起量に対する各研究が少ないため仮説が短絡的になってしまったことである。海外では盛んなノスタルジア研究であるが、今後国内でもノスタルジア喚起量についての研究が増えたり、新たな尺度が作成されたりすることによってより精密に測れるようになる可能性は大いにある。2 つ目は、個人を統制しきれていない部分が存在したことである。元々明るく社交的な人、トラウマがあり閉鎖的になってしまった人など、「性格」に関する要因を考慮していなかったため、仮説どおりに結果が得られなかった箇所が出てきたのだと思う。自己肯定感の高低や抑うつ傾向を事前に調査し反映することで、今回とはまた異なった結果が得られる可能性が高い。3 つ目は、調査参加者の年齢のばらつきである。本調査の年齢の内訳としては 21 歳と 22 歳が大多数を占めており、大学 3, 4 年生に相当している。19 歳や 20 歳といった大学 1, 2 年生の調査参加者の数が少ないため、「大学生における」という括りでいくと少々偏りが

あるようにも思われる。大学に入りたての頃と、就職や大学院入試等の将来を考える機会の多い頃では、ノスタルジアに対する思いに差異があると考えられるため、今後調査をする場合は年齢の分布が同程度になることが望ましい。

とはいっても、本調査によってノスタルジアに関する先行研究との一致や新たな側面が得られたことは、ノスタルジア研究の些細な助成となつたようだ。ノスタルジア喚起量や喚起後気分のみならず、ノスタルジアの内容自体やどのような際に喚起されやすいかなどを今後さらに深く掘り下げていくことで、複合的で難解といえど身近で大切な、ノスタルジア感情の解明につながっていくであろう。

### 引用文献

- Abeyta, A. A., Routledge, C., & Juhl, J. (2015). Looking back to move forward: Nostalgia as a psychological resource for promoting relationships goals and overcoming relationship challenges. *Journal of Personality and Social Psychology*, 109, 1029-1044.
- 浅沼 由美子 (2012). 信頼感に影響を及ぼす対人的経験とレジリエンスの関連 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 15, 41-51.
- Baldwin, M., Biernat, M., & Landau, M. J. (2015). Remembering the real me: Nostalgia offers a window to the intrinsic self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 108, 128-147.
- Batcho, K. I. (2013). Nostalgia: Retreat or support in difficult times? *American Journal of Psychology*, 126, 355-367.
- Baker, S. M., & Kennedy, P. F. (1994). Death by nostalgia: A diagnosis of

- context-specific cases. *Advances in Consumer Research*, 21, 169-174.
- Bonanno, G. A. (2004). Loss, trauma, and human resilience: Have we underestimated the human capacity to thrive after extremely aversive event? *American Psychologist*, 59, 20-28.
- Cheung, W. Y., Wildschut, T., Sedikides, C., Hepper, E. G., Arndt, J., & Vingerhoets, A. J. (2013). Back to the future: Nostalgia increases optimism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 39, 1484-1496.
- Connor, K. M., & Davidson, J. R. T. (2003). Development of a new resilience scale: The Connor-Davidson Resilience Scale (CD-RISC). *Depression and Anxiety*, 18, 76-82.
- Cottle, T. J. (1967). The circle test: an investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance, *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, 31, 58-71.
- Davis, F. (1979). *Yearning for yesterday: A sociology of nostalgia*. New York: Free Press. (デーヴィス, F. 間 場寿一・細辻恵子・荻野美穂 (訳) (1990) . ノスタルジアの社会学 世界思想社)
- Erikson, E. H. (1959). Identity and the life cycle: Selected paper. *Psychological Issues*, 1, 1-171.
- Garmezy, N. (1991). Resilience and vulnerability to adverse developmental outcomes associated with poverty. *American Behavioral Scientist*, 34, 416-430.
- Havlena, W. J., & Holak, S. (1996). Exploring nostalgia imagery through the use of consumer collages. *Advances in Consumer Research*, 23, 35-42.
- 平野 真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み — 二元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成 — パーソナリティ

- イ研究, 19, 94-106.
- 石毛 みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連 —受験期の学業場面に着目して— 教育心理学研究, 53 (3), 356-367.
- Juhl, J., Routledge, C., Arndt, J., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2011). Fighting the future with the past: Nostalgia buffers existential threat. *Journal of Research in Personality*, 44, 309-314.
- 勝俣 曜史 (1995). 時間的展望の概念と構造 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 44, 307-318.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26.
- Lewin, K. (1951). *Field theory and social science*. New York: HarperCollins Publishers. (レヴィン, K.猪俣佐登留 (訳) (1979) 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 三島 浩路 (2008). 小学校高学年で親しい友人から受けた「いじめ」の長期的な影響 —高校生を対象にした調査結果から— 実験社会心理学研究, 47(2), 91-104.
- 三宅 幹子 (2018). 心理的な well-being に対するノスタルジアの機能に関する研究の動向 岡山大学大学院教育研究科研究集録 第 167 号 1-9.
- 長峯 聖人 (2016). 日本におけるノスタルジアの定義に関する一検討 —アンビバレントな感情に着目して— 日本感情心理学会第 24 回大会発表論文集 p.os1
- 長峯 聖人・外山 美樹 (2018). 本邦におけるノスタルジアの機能的特徴 —感傷を伴う懐かしさという観点から— 筑波大学心理学研究,

56, 21-26.

長峯 聖人・外山 美樹 (2019). ノスタルジアが時間的態度に与える影響——本来性を媒介要因として—— 教育心理学研究, 67, 190-202.

長峯 聖人・外山 美樹 (2019). Southampton Nostalgia Scale 日本語版の作成 心理学研究, 4, 389-397.

新村 出 (2018). 広辞苑 第7版 岩波書店

大石 郁美・岡本 祐子 (2009). 青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 第8巻 43-53.

Rubin, D.C., Rahhal, T.A., & Poon, L.W. (1998). Things learned in early adulthood are remembered best. *Memory & Cognition*, 26, 3-19.

Sedikides, C., & Wildschut, T. (2017). Finding meaning in nostalgia. *Review of General Psychology*. Advance online publication.

Sedikides, C., Wildschut, T., Gaertner, Routledge, C., Arndt, J. (2008). Nostalgia as enabler of self-continuity. In F. Sani (ed.), *Self-continuity: Individual and collective perspectives*. (pp.227-239) New York: Psychology Press.

Sedikides, C., Wildschut, T., Routledge, C., & Arndt, J. (2015). Nostalgia counteracts self-discontinuity and restores self-continuity. *European Journal of Social Psychology*, 45, 52-61.

Sedikides, C., Wildschut, T., Routledge, C., Arndt, J., Hepper, E. G., & Zhou, X. (2015). To nostalgic: Mixing memory with affect and desire. *Advances in Experimental Social Psychology*, 51, 189-273.

白井 利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65(1), 54-60.

- Stern, B. B. (1992). Historical and personal nostalgia in advertising text: The fin de siècle effect. *Journal of Advertising*, 21, 1122.
- Stephan, E., Wildschut, T., Sedikides, C., Zhou, X., He, W., Routledge, C., Vingerhoets, A. J. J. M. (2014). The mnemonic mover: Nostalgia regulates avoidance and approach motivation. *Emotion*, 14, 545-561.
- 菅原 大地・Tee, E.・長峯 聖人・Tamilselvan, R.・宮川 裕貴・杉江 征 (2018) . 混合感情の文化比較 ——認知的評価理論の観点から —— 日本感情心理学会第 25 回大会発表論文集 p.os11
- 杉山 成 (1995) . 時間的展望の関連要因に関する研究の動向 立教大学 心理学科研究年報, 38, 39-52.
- 都筑 学 (1993) . 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学 研究, 41, 40-48.
- 津上 英輔 (2009) . 懐かしさと nostalgia —比較美学から感性史へ— 美學美術史論集, 18, 140-164.
- 津村 健太 (2015) . ノスタルジアが自己連續性に与える影響の検討 一 橋社会科学, 7, 43-52.
- Wildschut, T., Sedikides, C., Arndt, J., & Routledge, C. (2006). Nostalgia: Content, triggers, functions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 975-993.
- Zhou, X., Sedikides, C., Wildschut, C., & Gao, D-G. (2008). Counteracting loneliness: On the restorative function of nostalgia. *Psychological Science*, 19, 1023-1029.

## 謝 辞

本調査の実施及び本稿執筆にあたり，遠藤先生には3年次からこれまで多くのご指導ご鞭撻をいただき大変お世話になりました，この場をお借りして心より御礼申し上げます。また，助言をくださった同ゼミ生の皆様，査読をしてくださった3年生，そして，本調査にご協力いただきました調査参加者の皆様に深く感謝申し上げます。